山本勘介

（2）

竹内勇太郎

本勘介(2)

竹内勇太郎

学習研究社

江苏工业学院图书馆
藏书章

著者略歴 大正九年，山梨県生まれ。地方の新聞社に勤務の後，テレビ放送開始とともに脚本家としてデビュー。「赤胴鈴之助」「東京の人」「三匹の侍」など初期の代表作から最近の「新五捕物帳」まで作品多数。劇作もやるほか小説も手がけ，「小説樋口一葉」「女侠曼陀羅」「飛騨の女」などがある。

山本勘介 2

昭和六十年八月一日 第一刷発行

著者 竹内勇太郎

発行者 鈴木泰二

発行所 株式会社学習研究社
東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五
郵便番号 一四五
電話 東京七二〇局一一一一
振替 東京八―一四二九三〇

印刷 信毎書籍印刷株式会社
株式会社美術版画社

© YÛTARÔ TAKEUCHI Printed in Japan 1985

165 242—1002 ISBN4—05—101029—5 C0393

※この本に関するお問合せなどありましたら，文書は東京都大田区上池台4の40の5（〒145）学研お客さま相談センターへ，電話は東京（03）720—1111 へお願いします。

※本書内容の無断複写を禁じます。

目 次

濡れつばめ 7
狂恋 45
乱れ雲 89
鬼火 150

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

秩父の夕映え 192
霧の中 235
駿河の海 277

装幀　川田　幹
挿絵　木俣清史

山本勘介　2

（新聞連載小説「軍師流転」改題）

濡れつばめ

塚原門下八十名は、その日、鞍馬口をかためて勘介の姿を待ち続けた。申の刻を過ぎても姿を見せぬ勘介に、彼らは苛立ちをみせはじめた。そのとき、乱波衆の一人が、すでに勘介は糺の森で伊場ら四人と対決していると知らせた。

彼らは、急遽鞍馬口から糺の森に駆けつけた。だが、彼らは糺の森の手前で、伊場らの敗北を耳にした。この信じがたい敗北に、彼らは動転しながらも、塚原一門の名誉のためにも、勘介を討ち果たさなければといきりたった。

彼らが勘介の姿を求めて、糺の森になだれ込んだとき、勘介はすばやく群衆の中にまぎれ込んだ。

「あ、勘介は、あそこだ」

宰領役の飯尾刑部が、勘介の後ろ姿をみとめて叫んだ。

「勘介を逃すな」

門弟たちはわめき合いながら、勘介が姿を消した人垣に殺到した。

「邪魔だ、どけ」
「下がれ、けがするぞ」
門弟たちは群衆ともみ合った。
人々は、どよめきながらも、人垣を崩さなかった。彼らは門弟たちから勘介を守ろうとしていたのである。
「構わん。邪魔するやつは斬れ」
苛立って刑部が叫んだ。
門人たちは抜刀すると、群衆の中へ躍り込んだ。悲鳴と怒声が乱れ飛び、人垣が崩れた。
しかし、門人たちがその人垣を駆け抜けたときには、すでに勘介の姿はなかった。
勘介は、孫市とちづるの兄妹に守られるようにして、洛東(らくとう)、南禅寺(なんぜんじ)に向かって走っていた。
勘介が群衆の中にまぎれ込んだとき、
「勘介どの」
と、孫市が彼の手をとらえた。
「孫市どのか」
勘介が、驚いたように、孫市の顔を振り返った。
「勘介さま」
ちづるの白い顔があった。
「ちづるどの……」
勘介は思わず立ち止まった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

「さ、早く……参られよ」
孫市は勘介を引き立てるようにして走り出した。
「洛東の南禅寺下に、我らの隠れ家がある。ひとまずそこへ身を隠すのだ」
孫市は走りながら、勘介にそう伝えた。
程なく、南禅寺の本堂が、みどりの樹間から見えた。勘介たちは、七面重層入母屋造りの本堂の横を駆け抜け、雑賀党の隠れ家にその姿を消した。
「勘介さま、よう、ご無事で」
隠れ家でひと息ついた勘介に、ちづるはたかぶりを抑えながら震える声で言った。そのちづるの眸は、涙できらきらと輝いていた。
「心配をおかけしました」
勘介は素直にちづるに頭を下げた。
「ちづる、酒だ。まずは祝いの膳だ」
孫市が明るく弾んだ声で言った。
酒とさかなを前にして、三人は久方ぶりに心を開いて話し合った。執念深いお六から身を隠すため、雑賀から姿を消してからの来し方を、勘介は淡々と二人に話した。ちづるはその勘介を追い、四条河原で出雲のお千の世話をうけ、その消息を求めたことなどを勘介に告げた。
「それにしても、勘介どの」
孫市はやや改まった調子で言った。
「本日の働き、お見事でした」

その孫市の顔に感動があった。
「敵を知り、その敵にいかに備えるか……糺の森において、とくと教えられました」
「いや」
勘介は照れたように首を振った。
「あれは僥倖（ぎょうこう）……」
「なんの」
孫市はそれを否定した。
「相手は世に知られた塚原四天王。その四人に挑（いど）む勘介どのをはじめは暴挙と思い、胸の痛む思いでした……が、峰定寺（ぶじょうじ）での荒行をかいま見て……これはと、思い直したのです」
「では、峰定寺に孫市どのは……」
「ちづるともども……苦行の中、邪魔してはと、そのまま引き下がりました」
勘介は無言でうなずいた。
「それだけに、本日の対決、案じながらも望みは捨ててはおりませなんだ」
「恐れ入ります」
「一剣をもって、四剣を制す……そのためには、いかに闘うか……勘介どのは、それを見事にみせて下された」
「私は、ただ……」
勘介は、盃（さかずき）の酒にほんのり頬（ほお）を染めながら言った。
「師の愛洲移香久忠（あいすいこうひさただ）さまの、日頃の教えをそのままに……闘いの場に生かしただけのことです」

「よい弟子を持った……おそらく泉下の移香久忠どのも喜んでおられることでしょう」
孫市は深いまなざしで勘介をみつめた。
「この三年近くの歳月のうちに、勘介どのは大きくなられた……わしらの手の届かぬ程に……」
孫市はちづるの横顔に視線を移した。
「そうは思わぬか、ちづる」
「はい……」
ちづるは小さくうなずくと、まぶしそうに勘介の顔を見上げた。
「探りに出る」
孫市は腰をあげた。勘介を狙う塚原一門や、乱波衆の動きが気になっていた。だが、孫市が家を出たのはそれだけの理由ばかりではない。ちづるの心を思い、勘介と二人だけにしてやろうと思ったからであった。
孫市が去ったあと、ちづるは胸が詰まって言葉が出なかった。
もし、勘介に会えたなら、こうも言おう、ああも訴えようと、つもる思いを胸に秘め、その日を待ち続けたはずなのに、いざ勘介と向かい合うと、なにから話していいのか、ただ胸が熱くなるばかりであった。
「勘介さま」
ちづるは思いきって声をかけた。
「お教え下さいませ。ちづるは、これから、どうしたらよいのでしょうか」
「それは、ちづるどのが決めること……ちづるどのの心のままに生きられることだ」

「心のままに……私の心のままに生きろとおっしゃるのですか」
「そうです」
「私は……」
彼女は訴えるようなまなざしで、勘介を見上げた。
「勘介さまのお心のままに生きとうございます」
「気持ちはうれしい」
勘介は呟くように言った。
「だが、今の私は、そのちづるどのの心に応えられないのだ」
「応えて頂かなくても……私はただ勘介さまのおそばにおいて頂けるなら……」
ちづるの顔にはひたむきさがあった。
「私の師、移香久忠さまは、剣の奥義を究めるためには、円いの安らぎより、厳しい苦難の道を求めよと、常々さとされた。それによってなにをつかむことが出来るか、今の私には判らない……だが、私はその道を進もうと思っている」
「私がおそばにいては、足手まといになるとおっしゃるのですか」
「足手まといなら構わない。だが、私の心が乱れるだろう」
「勘介さま」
「私は男だ。いとしいと思う女子がそばにいれば、必ず煩悩の虜になる……ちづるどの、勘介はそれ程強い男ではないのだ」
ちづるは顔を伏せたまま無言であった。

「済まない」
勘介は呟くように言った。
「いいえ」
ちづるは小さく首を振った。
「お待ちしております。勘介さまがその志を果たすまで、ちづるは何年でもお待ち致します」
勘介は無言のまま、脂燭の灯影をみつめていた。
――私のことなど忘れて、しかるべき殿御のもとに嫁ぐことだ。
勘介はそう言いたかった。自ら求めて修羅の中に生きようとする自分にかかわれば、彼女の幸せは望めそうにない。
――ちづるを不幸にすることは出来ない。
それが勘介の愛であった。
その時、表の方で激しい太刀打ちの音が響いた。
顔をあげた二人の前に、血刀をひっさげて孫市が駆け戻ってきた。
「夜襲だ。塚原門下と乱波の孫兵衛の手の者が押しかけてくる」
孫市が荒い呼吸の中で言った。
「相手の数は……」
「塚原門下が百、それに乱波衆が約二百……いま、俺の配下が防いでいるが、そう長くは持つまい」
その孫市の言葉が終わらないうちに、雨戸を蹴破るようにして、抜刀した塚原門人たちが躍り

込んできた。
「勘介だ。斬れ」
宰領役の刑部が、門人たちに大声でわめいた。
「ここは私一人で食い止める。孫市どのとちづるどのは落ちられよ」
勘介は斬り込んできた門弟一人を、抜き打ちに斬りすてると叫んだ。
「いや、死なばもろともだ」
孫市が叫んだ。
「いかん。孫市どのには京に上った使命があるはず。過分な友誼は迷惑」
勘介は、次々に襲いかかる刃をはね返しながら叱咤した。
「勘介どの」
返り血を浴びた雑賀の男たちが駆け込んできた。
「ここは私一人でたくさんだ。おぬしらは孫市どのやちづるどのを守って、早う落ちられよ」
そう叫ぶやいなや、勘介は太刀を振り回しながら走り出した。
「逃すな」
刑部が声を張った。
駿足の勘介が南禅寺の曹洞池のところまで来たとき、樹間からいっせいに喚声が上がった。孫兵衛が指揮する伏兵であった。彼らは、それぞれに長柄槍や熊手、薙刀を振りかざして、勘介をとり囲んだ。
「斬れ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co